ふれあいコラム

今、話題の人物をクローズアップ！

バックナンバー

大夫
豊竹（とよたけ） 英大夫（はなふさだゆう）さん

■プロフィール
昭和22年大阪生まれ。十世豊竹若大夫の孫。20歳で三世竹本春子大夫に入門、翌年初舞台。1969年四世竹本越路大夫（人間国宝）の門下となる。文楽の世界には珍しいクリスチャン大夫。国立文楽劇場・国立劇場以外にさまざまなイベントに出演。海外公演の経験も豊富。

お客さんのかけ声や拍手、素直な反応が嬉しいね

大夫は場面説明や情景の描写、人形のセリフにいたる物語のすべてを語る、舞台の進行役です。公演中の出番を終え、「これで一日が無事終わった気分ですわ」と、くつろいだ様子の豊竹英大夫さんにお話を伺いました。

――英大夫さんがこの世界に入ったきっかけを教えてください。

祖父の影響で小さい頃から文楽を観たり、楽屋へ行ったりしていましたが、当時（約40年前）の文楽は一番の衰退期で。大阪の朝日座というところでやっていたけれど、お客さんよりも舞台上の人が多いときもあったりして、自分がやろうとは思っていなかったね。小説家になりたいと思っていたくらい。それが、20歳の頃、久しぶりに文楽を観たら、衝撃を受けて。「文楽はアブストラクト（抽象的な）芸術の極致だ」と思って。こんなにアブストラクトなことをやっていたんだって。文楽は古典芸能っていいますでしょ。でも初めて観る人にとっては新鮮なものですよね。私にとって20歳の頃に観た文楽も、まさにそれ。これはぜひやりたいなと思いましたね。

――舞台では大夫の語り分けが印象的ですが、やはりその役になりきるのでしょうか。

いろんな役に次々と切り替わらないといけないですから。切り替えが激しいので、その役になりきるのとはちょっと違うんです。なりきったようでなりきっていない。少し離れたところから見ている感じでしょうか。
語り分けは稽古のたまものですね。声の調子も公演初日と千秋楽では違ってきます。公演初日はキバッて少し硬い感じの声なんですが、だんだんと力みが抜けて、無理なく感情移入できるようになるんです。

――文楽の舞台を続けていく魅力とは？

やはり、お客さんの反応ですね。拍手をしてくれたり、かけ声を掛けてくれたり。海外公演に行くと差がはっきりわかります。情熱の国イタリアやブラジルでは、人形に刀が近づく場面があると、「NO～！」っていう声があがったり、ジェスチャーで表現したりして。舞

台を楽しんでくれているな、というのがわかるんです。日本でも『文楽鑑賞講座』などで「どこで拍手したり、かけ声をかければいいんですか？」と質問されるので、その練習をしてみたりするんですが、いざ本番となるとできない（笑）。やはり恥ずかしいと思うんでしょうが、もっと素直に楽しんでもらいたいですね。

連載コラムにて「伝統芸能の今を知る 文楽」掲載中です。こちらも合わせてお楽しみください！

▲このページのトップへ

｜個人情報保護について [PDF]｜

Kissポート財団
(公益財団法人 港区スポーツふれあい文化健康財団)
港区赤坂4-18-13赤坂コミュニティーぷらざ
電話：03-5770-6837/Fax：03-5770-6884
お問い合わせ：fureai-info@kissport.or.jp
Kissポート財団について

ISO 9001
ISO 14001
JQA-QMA12663
JQA-EM4580
たいせつにします プライバシー
10861140(03)

このホームページはKissポート財団の公式ホームページです。このホームページのすべての権利は当財団に帰属します。
当財団の許可なく複製、転載は出来ません。